

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：33801

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K14176

研究課題名(和文)曖昧な発話を解釈する能力の認知的基盤：ズレの「検出」と「反応」に着目して

研究課題名(英文)The cognitive basis of the ability to interpret ambiguous utterances: focusing on "detection" and "response" to incongruence.

研究代表者

村上 太郎 (Murakami, Taro)

常葉大学・保育学部・准教授

研究者番号：20762074

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、指示意図を解釈する語用論的処理「指示対象付与」に着目し、社会的場面(他者のやりとり場面)における幼児の指示対象付与方略の発達過程を、選択的信頼パラダイムを用いた行動実験によって解明することを目的とした。その結果、発話解釈の適切性を第三者的な視点から評価する能力は3-4歳児でもある程度みられ、明示的に評価できるようになるのは5-6歳児であることが示された。また、3-4歳児でも、文脈に応じた適切な解釈を行わない他者より適切な解釈を行う他者から選択的に学習をすることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の結果から、発話解釈の適切性を第三者的な視点から評価する能力は3-4歳児でもある程度みられ、明示的に評価できるようになるのは5-6歳児であることが示された。また、3-4歳児でも、文脈に応じた適切な解釈を行わない他者より適切な解釈を行う他者から選択的に学習をすることが示された。これらの結果から、二者間のコミュニケーションがかみ合っているかどうかを第三者的に評価する能力は幼児期において既に獲得しており、さらにはコミュニケーションがかみ合っていない人よりかみ合っている人から選択的に学習する可能性を示唆している。

研究成果の概要(英文)：This study focused on the pragmatic processing of interpreting referential intentions, "reference assignment". The study aimed to elucidate the developmental process of children's reference assignment strategy in social situations through behavioral experiments using the selective trust paradigm. The results showed that the ability to evaluate the appropriateness of speech interpretation from a third-party perspective is present to some extent in 3- to 4-year-olds and that it is not until 5- to 6-year-olds that they are able to evaluate it explicitly. The results also showed that even 3- to 4-year-olds selectively learn from others who interpret appropriately rather than from others who do not interpret appropriately according to the context.

研究分野：発達心理学

キーワード：指示対象付与 語用論 選択的信頼 他者意図理解 幼児

1. 研究開始当初の背景

私たちの日常的なコミュニケーションでは、発話や行動の意図が受け手にとって必ずしも明確(=一義的に解釈される)でないことがしばしばみうけられる。しかし、そのような曖昧さがあるにも関わらず、私たちは前後の文脈をふまえて話し手の意図を解釈し、コミュニケーションを成立させることができている。このように、文脈をふまえて他者の行動やメッセージの意図を解釈する研究領域は語用論と呼ばれる。

近年の乳児期の社会的認知能力の発達に関しては、他者の注意の所在や意図を理解する「共同注意」という行動の生後1歳半までの発達過程、その後の言語獲得や心の発達との発達の連関、そして自閉症スペクトラム障害(ASD)などの臨床的支援を考える上でも非常に重要な里程碑となることが示唆されている(大神・実藤, 2006)。また、言語発達に関する研究においては、語彙学習の方略(対象と語をどのように結びつけるのか)に特に焦点が当たった語彙学習メカニズムが明らかにされてきた(Imai & Haryu, 2001; Moll & Tomasello, 2007)。

その一方で、ある表現が誰・何を指すかを解釈する語用論的处理(指示対象付与)に関しては、先行する文脈から指示対象をどのように決定するかについて、成人の発話を対象とした理論的な検討は行われてきたものの、幼児を対象とした発達の検討はまだ多くはなされていない。Murakamiらは、指示対象付与課題を開発し、先行する文脈に基づいて指示対象を同定する能力が3歳から5歳にかけて発達することを示している(Murakami & Hashiya, 2014; 2019; Meng et al., 2017)。Murakamiらの一連の研究によって、曖昧な発話(質問)に対してどのような反応をするか、という幼児期の産出面を捉えてはいるものの、そもそも幼児が発話の曖昧性についてどの程度の気づきや認識を有しているのかを捉えることはまだできていない。

2. 研究の目的

本研究では指示対象付与課題(Murakami & Hashiya, 2014; 2019)を展開させて、第三者的な視点から曖昧なコミュニケーションを観察する場面における、ズレの「検出」に着目することを目的とする。加えて、本研究では「選択的信頼: 幼児は無知または正確でない他者を信頼しない(Koenig & Harris, 2005)」というパラダイムを方法として取り込んだ。本研究で検討する仮説は、「ズレを検出しているならば、文脈をふまえた適切な解釈をする他者を子どもは好む(信頼する)だろう」というものであり、この点は、これまでの選択的信頼に関する研究においても新たな視点を提示するものと言える。

3. 研究の方法

調査協力児: F県にある保育園に通う定型発達児79名。3-4歳児36名(男児20名, 女児16名, $M = 51.6$ months, $SD = 5.23$)、5-6歳児43名(男児20名, 女児23名, $M = 67.6$ months, $SD = 4.49$)であった。調査に際しては、園を通じて保護者に調査の趣旨を伝え、保護者からの同意が得られた児を調査の対象とした。

調査環境: 園内の静かな部屋を使用し、個別に調査を実施した。調査実施に際しては、導入として調査者と調査協力児は数分自己紹介などのやりとりを行い、課題を実施した。調査時間は1人当たり15分程度であった。

手続き: 以下に調査の流れを示す。

1) 指示対象付与フェーズ

子ども(実験協力者)に、2者間のやりとり場面をモニター提示する(右図)。2者間のやりとりは指示対象付与課題の教示をベースにしており、一方の人物(実験者1)が絵を見せて「これ何だ? / これ何色?」と尋ね、続いて「これは?」と尋ね、質問に対してもう一方の人物(実験者2)が言語的に反応した。

発話の解釈が「適切である / 適切でない」状況を設定するために、「これは?」という質問に対する実験者2の反応の仕方を実験的に操作した。

調査1(適切な指示対象付与 / 適切でない指示対象付与)

適切な指示対象付与条件: 先行する文脈をふまえて言及する。

適切でない指示対象付与条件: 先行する文脈をふまえてはいないが、提示刺激についての言及を行う。

調査2(適切でない・ニュートラルな声色の指示対象付与 / 適切でない・おどけた声色の指示対象付与)

適切でない・ニュートラルな声色の指示対象付与条件: 調査1と同様に、先行する文脈をふまえてはいないが、提示刺激についての言及を行う。

※2者間のやりとり場面をモニター提示



適切でない・おどけた声色の指示対象付与条件：先行する文脈をふまえてはいないが、提示刺激についての言及をおどけた声色で行う。

なお、調査1・2ともに、指示対象付与フェーズの終了後に話者評価質問として「どっちの人が上手に話してたかな？」と尋ねた。

2) 選択的信頼フェーズ

Koenig and Harris (2005)の手続きに準じた。実験者2が新奇物に新奇語をラベリングする(「これは『くつま』だよ」など)場面を子どもに見せ、指示対象付与フェーズでの実験者の反応の仕方によってどちらの情報提供者(実験者1または2)の新奇語のラベリングを信頼するかどうかを検討した(ラベル確認質問)。

4. 研究成果

結果を表1に示す。

調査1:(適切な指示対象付与/適切でない指示対象付与)

二項検定の結果、5-6歳児は話者評価質問において適切な指示対象付与を行った他者を「上手」と評価した(表中では「better choice」と表記。 $p < .001$)。そしてラベル確認質問においては、両年齢群において、適切な指示対象付与を行った他者のラベルを採用する傾向がみられた(表中では「label choice」と表記。3-4歳児, $p = .065$; 5-6歳児, $p = .066$)。

調査2:(適切でない・ニュートラルな声色の指示対象付与/適切でない・おどけた声色の指示対象付与)

二項検定の結果、5-6歳児は話者評価質問においてニュートラルな声色で答えた他者を「上手」と評価した($p = .006$)。しかし、ラベル確認質問においては、両年齢群においてラベル採用の傾向はチャンスレベルであった。

	Exp.1		Exp.2	
	better choice	label choice	better choice	label choice
3-4 year olds (N = 36)	21 (58%)	24 † (67%)	22 (61%)	19 (53%)
5-6 year olds (N = 43)	34 ** (79%)	28 † (65%)	31 ** (72%)	21 (49%)

** $p < .01$, † $.05 < p < .10$

Exp. 1. appropriate assignment speakerを選択した人数(%),

Exp. 2. neutral (inappropriate) speakerを選択した人数(%)

これらの結果から、発話解釈の適切性を第三者的な視点から明示的に評価する能力は5-6歳頃から可能になることが示された。また、3-4歳児でも、文脈に応じた適切な解釈を行わない他者より適切な解釈を行う他者から選択的に学習をする傾向が示された。さらに、適切でない解釈を行う2名の他者(ニュートラルな声色で答える/おどけた声色で答える)を情報提供者として比較した場合、答える際の抑揚などの影響は選択的信頼には影響しないことが示唆された。調査1と調査2の結果をふまえると、適切でない解釈を行ったと評価した他者からは学習しにくいことが示唆される。さらに、話者評価質問において「上手」と評価したからといって、その他者からラベル学習をするわけではないことから、幼児期において既に発話解釈の適切性(関連性)に基づいた他者評価を行っており、学習場面において選択的信頼の指標となっていることが示唆された。

本研究の結果から、二者間のコミュニケーションがかみ合っているかどうかを第三者的に評価する能力は幼児期において既に獲得しており、さらにはコミュニケーションがかみ合っていない人よりかみ合っている人から選択的に学習する可能性を示唆している。

主な参考文献

- Koenig, M.A. & Harris, P.L. (2005). Preschoolers mistrust ignorant and inaccurate speakers. *Child Development*, 76: 1261-1277.
- Murakami, T., & Hashiya, K. (2014). Development of reference assignment in children: A direct comparison to the performance of cognitive shift. *Frontiers in Psychology*, 5, 523. DOI:10.3389/fpsyg.2014.00523.
- Murakami, T., & Hashiya, K. (2019). Development in the interpretation of ambiguous referents in 3- and 5-year-olds. *Infant and Child Development*, DOI: 10.1002/icd.2137.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Kato Masaharu, Doi Hirokazu, Meng Xianwei, Murakami Taro, Kajikawa Sachiyo, Otani Takashi, Itakura Shoji	4. 巻 12
2. 論文標題 Baby's Online Live Database: An Open Platform for Developmental Science	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychology	6. 最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3389/fpsyg.2021.729302	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 村上太郎、谷口幹也、佐藤(中村)紗和子、樋渡由貴、石川勝彦	4. 巻 19
2. 論文標題 初年次PBL科目の学習成果にオンデマンド化が与える影響	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大学教育研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 石川勝彦、村上太郎	4. 巻 29
2. 論文標題 交差遅れモデルによる初年次PBL科目遠隔授業化の効果測定	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 高等教育ジャーナル	6. 最初と最後の頁 25-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 村上太郎・小林哲生	4. 巻 第57巻2号
2. 論文標題 絵本の絵を定量的に分類する尺度作成の試み	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 九州女子大学紀要	6. 最初と最後の頁 79-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 谷口幹也, 佐藤(中村, 紗和子, 樋渡由貴, 村上太郎
2. 発表標題 授業支援システムを用いたドキュメンテーションによるPBL型協働学修の効果評定
3. 学会等名 2021年度 ICT 利用による教育改善研究発表会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 石川勝彦, 村上太郎
2. 発表標題 オンデマンド授業の導入がPBLの学習成果に与えた影響
3. 学会等名 2021年度 ICT 利用による教育改善研究発表会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 村上太郎, 石川勝彦, 佐藤(中村, 紗和子, 谷口幹也
2. 発表標題 ハイブリット授業を通じたPBL型協働学修における協働力・批判的思考力の効果測定
3. 学会等名 2021年度 ICT 利用による教育改善研究発表会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Hiroko Norimatsu, Akira Takada, Koichi Negayama, Minako Kimura, Sandra Solomiac, Romane Soucas, Helene Cochet, Quentin Guillon, Taro Murakami
2. 発表標題 Understanding and Production of teasing in young children: Japanese-French comparison from the analysis of interview with parents of 0 to 6 year-old children
3. 学会等名 32nd International Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Taro Murakami
2. 発表標題 When do children make others laugh?
3. 学会等名 32nd International Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 村上太郎, 鹿子木康弘
2. 発表標題 公的自己意識の発達の起源に関する予備的検討
3. 学会等名 日本赤ちゃん学会第21回学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 村上太郎
2. 発表標題 認定こども園における特別な支援を必要とする児への支援体制構築の試み
3. 学会等名 日本保育学会第74回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 村上太郎
2. 発表標題 発話解釈の適切性に基づいて幼児は選択的に学習するか
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------